放課後の金木犀。

皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後の金木犀。

【Ｎコード】
Ｎ２６２５Ｆ

【作者名】
皐月

【あらすじ】
金木犀を見ていたら、後ろから男の子から声をかけられた。金木犀のいい匂いに包まれて・・・。

放課後。

私は、たまたま一人で。

中庭にいた。

私は、

中庭に咲く。

金木犀(きんもくせい)が好きだったから。

匂いも、

あの小さくて、

黄色と橙色が混ざったような色も。

すごく、いい気持ちになるから。

甘くて優しい匂い。

秋は紅葉も良いけれど。

私は、金木犀のほうが好き。

小さくて儚くて。
でもくっきりと存在していて。

「なにやってるの？」

急に壊される静寂。

もっとこの金木犀の匂いを、
かいでいたいのに…？

「金木犀と遊んでいるの。」

「へぇ・・。金木犀っていいにおいだもんね」

そういわれて、声の主に目を向ける。

「志野(しの)君…？」
「よっ。川嵜(かわさき)さん。」

クラスメートの、志野君だった。

「金木犀か・・・。夕暮れに似合ってるね。」
「うん・・・私もそう思う。」
「川嵜さん。・・・ちょうど二人きりだし、言いたい事があって。」
「え・・・？」

ほのかな期待を胸に、

志野君の声に耳を澄ます。

「川嵜美帆さん。・・・俺は、前から、す・・・」

・・す・・・？

「・・・好きでした。」

その声に同調するように、
金木犀が風に揺れる。

嘘・・・？

ありえないことだった。
両思いになって、
つきあうだなんて。

志野君が、
私の事を・・・？

じゃあ・・・

私の、　気持ちも・・・。

金木犀に勇気を貰って。

素直に伝えよう。

「私も、好きです・・・・。」

秋の夕暮れ。

金木犀をバックに。

２人の影が、

１つになったところが。

今、見える。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2625f/

放課後の金木犀。

2011年1月21日02時38分発行